

## 被動目的語と there 構文の非対格性制約について\*

本 田 隆 裕

### On Affectum Objects and the Unaccusative Restriction in *There*-Constructions

Takahiro HONDA

#### 1. はじめに

英語において多くの動詞は、(1)に示すように、一つの動詞が他動詞文と自動詞文の両方に現れ得ることが知られている。

- (1) a. John broke the vase.  
b. The vase broke.

一方で、(2)のように他動詞用法のみを持つ動詞や、反対に、(3)のように自動詞用法のみを持つ動詞があることも知られている。

- (2) a. She baked a cake.  
b. \*A cake baked. (影山 1996: 161)
- (3) a. \*The magician appeared a rabbit out of his hat.  
b. A rabbit appeared out of the magician's hat. (Levin 1993: 3)

料理動詞は、(2)のように目的語が結果目的語 (effectum object) となっている場合、他動詞用法のみが容認可能であると言われている。(2)のケーキ (a cake) はもともと存在していたものではなく、「焼く (bake)」という出来事を経て、初めて出現するものであり、このような対象は結果目的語と呼ばれている。他方、(4)のように、動詞が表す出来事が生じる前から存在しており、動詞が表す出来事により何らかの状態変化を表す対象は被動目的語 (affectum object) と呼ばれている。<sup>1</sup>

- (4) a. She baked the potatoes. (影山 1996: 161)  
b. The potatoes baked. (Levin 1993: 243)

(3)に示した動詞は非対格動詞 (unaccusative verb) と呼ばれており、このような動詞が現れる文では主語になっている項が、動詞によって表される行為を向けられる対象 (Theme) として解釈される。この点では、(3b)の a rabbit も(1b)の the vase もどちらも同じく対象として解釈されていることから、(1b)の break も非対格動詞の一つとして扱われる場合があるが、同じ動詞であっても、

(1a)のように他動詞文を作ることができる自動詞は能格動詞 (ergative verb) と呼ばれている。本論文では、(3)の appear のように他動詞文を作ることができず、その唯一の項が対象として解釈される動詞のみを非対格動詞と呼ぶことにする。

非対格動詞の特徴の一つとして、(5)のように、主語位置に動詞の唯一の項が現れることもあるが、項を動詞の補部の位置に置き、主語位置には虚辞 **there** が挿入される場合もあることが知られている。

- (5) a. A ship appeared on the horizon.  
 b. There appeared a ship on the horizon. (Levin 1993: 89)

同じ自動詞であっても、(6)の run のように唯一の項が動作主 (Agent) を表す非能格動詞 (unergative verb) や、(7)の sink のような能格動詞が現れる文では、このような **there** 挿入は不可能である。<sup>2</sup>

- (6) a. A little boy ran in the yard.  
 b. \*There ran a little boy in the yard. (Levin 1993: 89–90)
- (7) a. The boat sank.  
 b. \*There sank three ships last week. (Haegeman 1991: 334–335)

このような事実から、ある動詞が非対格動詞であるかどうかを判定する際に、**there** 挿入が可能かどうかという基準が用いられることがある。

ただし、非対格動詞の一つと考えられる **die** は **there** 構文に現れることはできない。<sup>3</sup>

- (8) a. Some people died in that fire.  
 b. \*There died some people in that fire. (Milsark 1974: 252)

(5)の appear のような動詞が、(8)の die のような動詞と異なる点は、「出現・発生」の意味を持つことであり、**there** 挿入が可能な動詞は単に非対格動詞であればよいというわけではなく、非対格動詞の中でも「出現・発生」あるいは存在を表す動詞に限定されると考えられている。高見・久野 (2002)では、**there** 構文に現れる動詞が、存在と出現を表す非対格動詞に限定される事実を **there** 構文に課される非対格性制約と呼んでいる。

本論文では、(2)のような結果目的語を伴う料理動詞や、(3)のような非対格動詞が、他の多くの動詞と異なり、他動詞文と自動詞文の両方に現れることが不可能である理由について、統語論の視点から説明を試みる。また、**there** 挿入が可能な動詞が「出現・発生」を表す動詞に限定されるという非対格性制約についても考察し、これらの理由についての説明が、結果目的語と被動目的語の統語的な違いから導き出せることを提案する。

## 2. 影山 (1996)の分析

影山 (1996)は金水 (1994)の状態変化動詞に関する分析に基づき、appear のような出現・発生動詞と、break のような状態変化動詞 (能格動詞) は、同じように自動詞文に表れていてもそれぞれ異なる概念構造を持っていると提案している。

- (9) a. 出現・発生動詞 : [EVENT BECOME [STATE y BE AT-z]]  
 b. 状態変化動詞 : [EVENT y BECOME [STATE y BE At-z]]

出現・発生動詞と状態変化動詞は、それぞれ語彙が BECOME と BE という述語から成り立っているが、出現・発生動詞における BECOME は STATE だけを項に取るのに対して、状態変化動詞における BECOME は STATE だけでなく、内項（ここでは、状態変化を受ける既存の対象物）も項として取るということを表している。影山は、例えば、「ニキビができる」という表現では、もともと存在していなかったものが生じるのに対し、「魚が腐った」という表現では、腐った魚がいきなり現れたわけではなく、もともと新鮮な魚があって、それが変化を被ったことを意味している点に着目し、出現・発生動詞と状態変化動詞の違いを説明している。つまり、動詞が表す変化前の存在が認識される場合は、概念構造において、内項が BECOME の項としても現れるという違いがあることになる。

また、影山は(1a, b)のような自他交替 (transitivity alternation) について、他動詞用法と自動詞用法の概念構造は基本的に同じであるが、自動詞用法の場合、(10b)に示すように、使役主 (x=y) が変化対象 (y) と同定され、意味的に束縛される反使役化 (anti-causativization) が起こっていると説明している。

- (10) a. 他動詞用法 : [x CONTROL [y BECOME [y BE AT-z]]]  
 b. 自動詞用法 : [x=y CONTROL [y BECOME [y BE AT-z]]]

この考え方は、一見すると、例えば Chomsky (2008)に見られるような、自他交替に関する統語的な分析とは異なるように思われる。Chomsky (2008) (厳密には、Chomsky (2015)以降の分析) では、動詞は動詞の語根 (root) と動詞という範疇を決定するために必要な軽動詞 (light verb) と呼ばれる機能範疇の2つの語彙項目から構成されており、他動詞と自動詞の違いは(11a, b)のように捉えられている。

- (11) a. 他動詞 : [<sub>VP</sub> 外項 [v\* [<sub>VP</sub> V 内項]]]  
 b. 自動詞 : [<sub>VP</sub> v [<sub>VP</sub> V 内項]]

この考え方に基づけば、他動詞と自動詞の違いは語根である V (Chomsky (2015)では R) には見られず、VP を選択する軽動詞の違いに起因するものであると言える。他動詞の構造には、外項を併合 (Merge) する軽動詞 v\*が含まれているのに対して、自動詞の構造には外項を併合せず、単に動詞という範疇を決定するための軽動詞 vが含まれているという違いがある。

影山と Chomsky はそれぞれ異なる視点から自他交替を捉えようとしているため、単純に両者の分析を比較できない部分もあるが、影山の分析では他動詞も自動詞も基本的な概念の部分は共通していることになり、自動詞では使役主と変化対象の同定に着目している点が Chomsky の分析とは異なる。(11)のような Chomsky の統語分析ではこの使役主と変化対象の同定を捉えることができない。Chomsky は、軽動詞のタイプとして v\*と vの2種類しか言及していないが、次節以降で、軽動詞についてさらに詳細な分析をすることで、影山の反使役化を統語的に捉えることができることを示す。

### 3. 動詞句の構造

Fujita (1994)、藤田・松本 (2005)は、(12)のような他動詞(厳密には使役交替 (causative alternation) が可能な使役動詞)の主語は、動作主であるとも解釈できるし、原因項であるとも解釈できるという点を指摘している。

(12) John (intentionally / unintentionally) broke the pot. (藤田・松本 2005: 89)

また、他動詞の主語が動作主として解釈される際には、同時に原因項としても解釈されることを踏まえ、(12)は、概略、(13)のような構造から派生されると提案している。

(13) [<sub>VP</sub> 動作主 [v1 [<sub>VP</sub> 原因項 [v2 [<sub>VP</sub> V 対象]]]]]

(13)の構造において、(12)の内項に該当する the pot は対象として解釈されるが、外項である John は原因項 (Causer) でありながら、意志・意図性を持って break という行為をした動作主として解釈される場合もあり、また意図的ではないが break という出来事の原因となっている解釈も可能である。(13)において、v1 は動作主の  $\theta$  役割を与える軽動詞であり、v2 は原因項の  $\theta$  役割を与える軽動詞となっている。(藤田・松本 (2005)では明確な言及はないが、対象の  $\theta$  役割は V によって内項に付与されるものと考えられる。)他動詞の主語が動作主・原因項として解釈される理由であるが、(12)のような文が派生される際に、(13)のような構造において、外項がまず原因項として v2 の指定部に併合され、その後、さらに v1 の指定部に移動することで動作主の役割も受け取る派生が可能であるという分析が示されている。一方で、他動詞の主語が原因項としてのみ解釈される場合は、v1 が構造の中に含まれず、(14)のような構造になっている場合であると考えられる。

(14) [<sub>VP</sub> 原因項 [v2 [<sub>VP</sub> V 対象]]]

さらに、藤田・松本は、能格動詞について複数の派生の可能性を述べているが、その一つが、能格動詞は(14)と同じ構造を持つというものである。能格動詞文の場合は他動詞文と異なり、内項のみが現れるのであるが、その内項がまず対象として V と併合され、その後、v2 の指定部に移動して原因項の役割も受けとると考えられている。これは、能格動詞が(15)のように all by itself という表現と共起可能であることから、能格動詞の主語は対象であると同時に原因項にもなり得るという事実と合致する。

(15) The boat sank all by itself. (Keyser and Roeper 1984: 405)

つまり、藤田・松本 (2005)で示されている上記の分析に基づけば、能格動詞文では、(14)の構造において、「原因項」=「対象」という関係が成り立っており、これが(16)の影山の反使役化を統語的に反映していることになると考えられる。

(16) [x=y CONTROL [y BECOME [y BE AT-z]]] (= (10b))

上で見たように、能格動詞の内項が、(14)のような構造においては対象と原因項という2つの  $\theta$

役割を複合的に付与されているが、藤田・松本 (2005)では、このように、項が  $\theta$  役割を付与する機能範疇の指定部へ移動することにより  $\theta$  役割を与えられるという派生的  $\theta$  標示が提案されている。次節では、このような派生的な  $\theta$  標示が反使役化を統語的に反映するものと仮定して、自己交替が不可能な動詞について議論する。

#### 4. 非対格動詞文の派生

第1節で述べたように、非対格動詞は自動詞文にのみ現れ ((17a, b))、非対格動詞の中でも出現・発生の意味を表す動詞のみ there 挿入が可能である ((18a, b))。

- (17) a. \*The magician appeared a rabbit out of his hat.  
 b. A rabbit appeared out of the magician's hat. (= (3))
- (18) a. There appeared a ship on the horizon. (= (5b))  
 b. \*There died some people in that fire. (= (8b))

ここで疑問となるのは、そもそもなぜ非対格動詞は他動詞文に現れることができないのかという点と、なぜ there 挿入が一部の非対格動詞に限定されるのかという点である。

まず、there 挿入が一部の非対格動詞に限定される理由について検討しよう。(18)にあげた動詞である appear と die については、以下のような違いが見られる。

- (19) \*Karen appeared a striking appearance at the department party.  
 (Levin and Rappaport Hovav 1995: 150)
- (20) a. He died an untimely death. (Horita 1996: 225)  
 b. Your son died a soldier's death in the cause of democracy. (ibid.: 242)

非能格動詞と非対格動詞の違いの一つとして、(21b)のように前者は同族目的語構文 (Congate Object Construction) に現れ得るが、後者は(19)に示したように同族目的語 (cognate object) を取ることができないと言われている。

- (21) a. Sarah smiled.  
 b. Sarah smiled a charming smile.  
 (roughly: Sarah smiled charmingly.)  
 c. ?? Sarah smiled a smile. (Levin 1993: 95)

しかし、(20)に示したように一般に非対格動詞に分類される die は同族目的語を取ることが可能である。これについて、例えば、Larson (1988)は、“die a painful death”のような表現が可能であることから die を非能格動詞として分類している。しかし、Horita (1996)や堀田 (2005)は、die の項は動作主ではなく、(22)のように受動化が不可能である点からも、die を非能格動詞と分類する Larson の主張は動詞の意味を考慮した分析とはなっていないと指摘している。

- (22) a. \*A natural death was died by my grandfather.  
 b. \*A soldier's death was died by your son. (Horita 1996: 242)

藤田・松本 (2005: 61)は非能格動詞の構造として、同族目的語が出現する場合もしない場合もどちらも(23)のような構造から派生される可能性を指摘している。

- (23) [vP Subj [v [vP V<sub>smile</sub> Obj<sub>φ/a</sub> charming smile]]]

藤田・松本によれば、(23)のように、非能格動詞も他動詞と同様に補部を持つと考えられ、非能格動詞は目的語がVに編入 (incorporate) することで生じると考えることも可能である。(23)においてφと記した部分は実際には発音されない空範疇を意味するが、非能格動詞において、この空範疇は動詞に編入された目的語の痕跡 (コピー) であると考えられる。藤田・松本は、(21b, c)の対比が示すように、同族目的語には何らかの修飾語が伴われなければならないが、その修飾語の介在がこの空範疇を音形化する誘因になっていると説明している。

藤田・松本の非能格動詞の派生及び同族目的語に関する分析が正しいとして、dieの項 ((20)におけるheやyour son) はどのようにして派生に導入されるのであろうか。ここで、appearのような出現・発生を表す動詞の項とdieの項の違いを第1節で見た結果目的語・被動目的語という視点から捉えてみよう。すると、appearのような動詞の項は結果目的語となっており、dieのような動詞の項は被動目的語となっていると考えられる。ここで、(24)のような仮説を立てる。

- (24) 被動目的語には、「被動項 (Affectum)」というθ役割が与えられている。

藤田・松本の派生的θ標示の考え方を採用するのであれば、動詞の項は被動項の役割だけを受けられる場合もあれば、他の役割と併せて複合的にθ役割を付与される可能性も考えられる。その考え方に基づけば、(25a, b)の動詞句はそれぞれ(26a, b)のような構造を持つと考えられる。<sup>4</sup>

- (25) a. She baked a cake. (= (2a))  
 b. She baked the potatoes. (= (4a))  
 (26) a. [v<sub>1P</sub> 動作主 [v1 [v<sub>2P</sub> 原因項 [v2 [v<sub>P</sub> V 対象]]]]] (= (13))  
 b. [v<sub>1P</sub> 動作主 [v1 [v<sub>2P</sub> 原因項 [v2 [v<sub>3P</sub> 被動項 [v3 [v<sub>P</sub> V 対象]]]]]]]

他動詞文において、目的語が結果目的語と解釈される文では、(26a)で示した他動詞文の構造となっているが、目的語が被動目的語と解釈される文では、(26b)に示したように、v<sub>2P</sub>とVPの間に被動項の役割を与える軽動詞v<sub>3</sub>の投射が存在すると考えられる。この分析では、(25b)のthe potatoesは、まず対象としてVの補部に併合され、その後、さらに被動項の役割を受け取るためにv<sub>3</sub>の指定部へ移動していると考えられる。この派生において、被動目的語は対象・被動項の役割を複合的に付与されていると言える。

(24)の仮定と藤田・松本の同族目的語の分析に基づけば、(20)の動詞句は(27)のような構造を持つと考えられる。

- (27) [v<sub>3P</sub> 被動項<sub>he/your son</sub> [v3 [v<sub>P</sub> V<sub>die</sub> 対象<sub>φ/an untimely death/a soldier's death</sub>]]]



素との素性共有がなければ(30b)に「?P」と示した集合のラベルを決定することができない。Chomsky (2013, 2015)では、全ての統語対象物 (syntactic object) には適切なラベルが付けられなければ解釈不可能になると考えられている。したがって、併合の操作により構築された集合にはそれぞれラベル付けがなされなければならない。Chomsky によれば、語彙項目である主要部とすでに併合により形成された句が新たに併合されて形成された{H, XP}という集合においては、主要部である H がその集合のラベルとなる。一方、句と句が併合された結果生じた集合である{XP, YP}のような集合にはラベル付けを行うことが不可能であるが、XP または YP のいずれかが移動した場合や、XP と YP に共有される素性がある場合にはラベル付けが可能となる。詳細は割愛するが、Chomsky (2015)では英語の T は主要部であるものの、ラベル付けが不可能な要素であり、素性共有によるラベル付けが必要となり、Honda (2020)ではD1 も T と同様にラベル付けが不可能な要素であると提案している。このラベル決定のために、(30c)のように D1 が T の指定部へ移動することで、(30c)の集合全体のラベルは D1 と T が共有する人称素性 (<Person, Person>) となる。Honda (2020)では、虚辞 there は D1 が D2 と分離した際のみ there として具現されると提案している。なお、(30b)のラベル決定のためには、D1 のみが移動する場合もあれば、D1 が D2P を伴って移動することも可能であり、その場合、(31a)のような文が(31b)のような構造により派生されると考えられる。

(31) a. A ship appeared.

b. [<sub><φ, φ></sub> [D1<sub>[Person:3]/[Case:Nom]</sub> [D2P D2<sub>[Number:Sg]</sub> a ship<sub>[Person:3]/[Number:Sg]</sub>]<sub>i</sub> [T<sub>[Person:3]/[Number:Sg]</sub> [<sub>vP</sub> [<sub>vP</sub> √APPEAR <sub>t<sub>i</sub></sub>]]]]

(31b)においては、人称素性だけでなく数素性の共有が T と行われるため、全体のラベルは人称・数の両方の素性を合わせた φ 素性となる。

では、(18b)のような文の構造はどのようになっているのであろうか。(27)に示した die の構造を仮定すると、(18b)は(32b)のような構造になっていると考えられる。

(32) a. \*There died some people in that fire. (= (18b))

b. [<Person, Person> [D1<sub>[Person:3]/[Case:Nom]</sub>]<sub>i</sub> [T<sub>[Person:3]/[Number:Pl]</sub> [<sub>?P</sub> [<sub>t<sub>i</sub></sub> [D2P some people]<sub>[Number:Pl]</sub>] [<sub>v3</sub> [<sub>vP</sub> √DIE φ]]]]]]

先に、(27)の集合のラベルについては v3P と記載していたが、実際には被動項と v3 の間には共有される素性がないため、{被動項, v3P}という集合のラベルは決定できず、(32b)の「?P」という部分はそのことを表している。θ 役割も素性の一つ (θ 素性) とする Hornstein (1999)の分析においても、θ 素性を担うのは動詞などの述語だけであり、項である名詞表現はそのような素性を持たないと考えられており、(32a)が容認されない理由は、D2P の主要部である D2 と v3 の間に共有される素性がなく、(32b)の「?P」という部分は{D2P, v3P}という句同士の集合である{XP, YP}構造となっており、適切なラベル付けが不可能であるためだと考えられる。Chomsky (2013)によれば、{XP, YP}という句同士の集合であっても、XP または YP が移動することによりラベル付けが可能となるが、(32b)において、T の指定部へ移動する要素が D1 単体ではなく、D2P を伴った(33b)のような移動であればラベル付けに問題はなく、(33a)のような容認可能な文が派生される。



- (33) a. Some people died in that fire. (= (8a))  
 b. [<sub><φ, φ></sub> [D1<sub>[Person:3]/[Case:Nom]</sub> [D2P some people]<sub>[Number:Pl]</sub>]<sub>i</sub> [T<sub>[Person:3]/[Number:Pl]</sub> [<sub>v3P</sub> t<sub>i</sub> [<sub>v3</sub> [<sub>VP</sub> √DIE φ]]]]]

一方、appear, die どちらのタイプであっても非対格動詞が一般に他動詞文に現れない理由であるが、第2節で見たように、自他交替が反使役化により生じるのであれば、常に appear は(34a)のような概念構造を持ち、die は(34b)のような概念構造を持つことになり、いずれの語彙も CONTROL という概念が含まれないためであると考えられる。<sup>7</sup>

- (34) a. 出現・発生動詞： [EVENT BECOME [STATE Y BE AT-z]] (= (9a))  
 b. 状態変化動詞： [EVENT Y BECOME [STATE Y BE At-z]] (= (9b))

ここで問題となるのは、非対格動詞とは真逆のパターンと言える、料理動詞が結果目的語を伴う際にはなぜ自動詞文に現れないのかという問題である。次節ではこの点を取り上げる。

## 5. 料理動詞文の派生

第1節で見たように、bake などの料理動詞は結果目的語を伴う場合、自他交替が不可能であり、被動目的語を伴う場合は、自他交替が可能である。

- (35) a. She baked a cake. (= (2a))  
 b. \*A cake baked. (= (2b))  
 (36) a. She baked the potatoes. (= (4a))  
 b. The potatoes baked. (= (4b))

まず、(36)のように被動目的語が現れる場合の派生を検討しよう。(36)の the potatoes は bake という行為を受ける対象であり、また(24)の仮説に基づけば、被動項の役割も受けていると考えられる。したがって、(36a, b)はそれぞれ(37a, b)のような構造により派生されていると考えられる。

- (37) a. [<sub><φ, φ></sub> she<sub>j</sub> [T [<sub>v1P</sub> t<sub>j</sub> [<sub>v1</sub> [<sub>v2P</sub> t<sub>j</sub> [<sub>v2</sub> [<sub><φ, φ></sub> the potatoes<sub>i</sub> [<sub>v3</sub> [<sub>VP</sub> √BAKE t<sub>i</sub>]]]]]]]]]]]  
 b. [<sub><φ, φ></sub> the potatoes<sub>i</sub> [T [<sub>v2P</sub> t<sub>i</sub> [<sub>v2</sub> [<sub>v3P</sub> t<sub>i</sub> [<sub>v3</sub> [<sub>VP</sub> √BAKE t<sub>i</sub>]]]]]]]]]

(37a)において、the potatoes は対象として、√BAKE の補部に併合され、その後、被動項の役割を受け取るために、v3 指定部へ移動する。他動詞では目的語に対格が付与されるが、これは v1 または v2 が値未付な φ 素性を持ち、その素性が v3 に継承される (Chomsky (2008)) ことで、{the potatoes, v3P} という句同士の集合のラベルが φ 素性となるとともに、the potatoes に対格の値が付与される。一方、she は原因項として併合され、動作主の役割を受け取るため v1 指定部へ移動し、さらに T と一致し、主格を受け取るために T の指定部へ移動する。

(37b)の派生では、the potatoes が対象、被動項の役割を受け取る点では(37a)と同様であるが、(36b)の文では反使役化が起こっていると考えられるため、第3節で見た能格動詞の派生と同じく、内項が原因項の役割も受け取っていると考えられる。そのため、(37b)においては、v3 の指定部にあった the potatoes が v2 の指定部へ移動して原因項の役割を受け取り、さらに T の指定部へ移動し

て主格の値を付与されていると考えられる。

一方、(35a, b)の派生はそれぞれ(38a, b)のようになっていると考えられるが、被動項の役割を与える v3 ではなく、何の役割も与えない軽動詞 v が代わりに含まれているという点のみ(37)の派生とは異なる。

- (38) a. [<sub><φ, φ></sub> she<sub>i</sub> [T [<sub>v1P</sub> t<sub>i</sub> [<sub>v1</sub> [<sub>v2P</sub> t<sub>i</sub> [<sub>v2</sub> [<sub>vP</sub> v [<sub>VP</sub> √BAKE a cake]]]]]]]]]  
 b. [<sub><φ, φ></sub> a cake<sub>i</sub> [T [<sub>v2P</sub> t<sub>j</sub> [<sub>v2</sub> [<sub>vP</sub> v [<sub>VP</sub> √BAKE t<sub>i</sub>]]]]]]]

(38a)において、√BAKE の対象として併合された a cake が対格を付与される方法であるが、一つは v2 から v に φ 素性が継承され、実際には(38a)のような構造ではなく、a cake が v 指定部へ移動している可能性がある。最終的な内項の位置は不明であるが、(38a)においては(32b)で指摘したようなラベルの問題は生じない。

(38b)では、a cake が√BAKE の対象として併合され、v2 指定部を経由して、T 指定部へ移動する派生となっており、ラベル付けの問題などは見られないが、実際には(35b)のように容認不可能な文が派生される。この事実を説明するために、(39)の仮定を立てる。

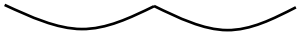
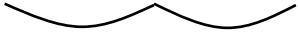
- (39) 派生的 θ 標示の連鎖は同一フェイズ (phase) 内においてのみ成立する。

ここでは、全ての軽動詞がフェイズ (Chomsky (2000, 2001, 2008)) を形成すると仮定しておく。(37b)の派生において、the potatoes は、「対象→被動項→原因項」の順に θ 役割を与えられていくが、「対象→被動項」の連鎖に関しては、V の補部から v3 指定部への移動となっており、「被動項→原因項」の連鎖に関しては、v3 指定部から v2 指定部への移動となっている。一方、(38b)においては、「対象→原因項」という連鎖が考えられるが、この連鎖は原因項の役割を与える軽動詞 v2 とは異なる軽動詞 v の補部領域にある対象との間に形成されなければならない。上位フェイズからアクセス可能な下位フェイズ内の位置は、下位フェイズの端 (edge) である指定部のみであることから、「対象→原因項」という連鎖形成のためにはフェイズの境界線を越えることになり、(39)の条件に違反するため、(35b)のような文は容認不可能となっていると説明できる。

最後に、英語では(35b)のような料理動詞 (作成動詞) の自動詞化が不可能であるのに対し、日本語では(40)のような自動詞化が可能であるという影山 (1996)の指摘について検討したい。

- (40) a. ホットケーキを焼いた。  
 b. ホットケーキが焼けた。 (影山 1996: 193)

詳細は割愛するが、影山 (1996: 194)は、英語の反使役化には(41)に示すように、概念構造において CONTROL の主語、BECOME の主語、BE の主語の3つが同定される必要があるが、日本語においては、(42a)に示したように、英語と同じような同定も、(42b)に示したように BECOME の主語を欠いた同定も可能であることを指摘している。

- (41) 英語 : x<sub>1</sub> CONTROL [y<sub>1</sub> BECOME [y<sub>1</sub> BE AT-z]]  
  
 (42) a. 日本語 : x<sub>1</sub> CONTROL [y<sub>1</sub> BECOME [y<sub>1</sub> BE AT-z]]  


- b.  $x_1$  CONTROL [BECOME [ $y_1$  BE AT-z]]

影山は、(42b)のように CONTROL の主語と BE の主語を「一足飛びに」同定することを可能にしているのは、日本語の「-e-」という接辞であると主張している。この分析は統語的にはどのような操作に該当するのであろうか。一つの可能性として、日本語と英語の料理動詞が基本的には同じような統語構造を共有し、日本語の接辞-e-は、動詞という範疇を決定する軽動詞  $v$  に付加する要素であるか、あるいは接辞-e-そのものが軽動詞  $v$  に相当するということが考えられる。ここでは、-e-が軽動詞  $v$  そのものに該当すると仮定し、(40b)の派生を(43)のように考えてみよう。<sup>8</sup>

- (43) [<sub>TP</sub> ホットケーキが<sub>i</sub> [[<sub>v2P</sub>  $t_i$  [[<sub>VP</sub> [<sub>VP</sub>  $t_i$  √焼 k-] -e-] v2]] T]]

(43)においては、V である「√焼 k-」の対象として「ホットケーキ」が併合され、v2P 指定部へ移動し、さらに TP 指定部へ移動している。英語においては、「対象→原因項」という連鎖を形成する V 補部から v2 指定部への移動は(39)により不可能であった。一方、日本語では(43)のような派生が容認される理由として、-e-という接辞はフェイズを形成しない軽動詞となっているか、あるいは他の軽動詞に付加することにより、その軽動詞がフェイズ主要部となることを阻止する役割を果たしており、そのため英語と異なり、日本語においては「対象→原因項」という連鎖が(39)に違反することなく形成可能であるということが考えられる。<sup>9</sup>

## 6. 結論と今後の課題

本論文では、結果目的語と被動目的語の違いを統語的に説明することを試み、その分析に基づき、非対格動詞の中でも there 挿入が可能な動詞が出現・発生动詞に限定される理由と料理動詞が結果目的語を持つ場合は自他交替が不可能である理由について説明した。英語の動詞 appear と die はどちらも非対格動詞として分類されることがあるが、appear は同族目的語を取らないのに対して、die は同族目的語を取るという点に着目し、2つの動詞は異なる統語構造から派生されていると説明した。appear は結果目的語を項として取るのに対し、die は被動目的語を取り、被動目的語が結果目的語とは異なる統語的な位置に生じるとする仮説を立てることで、die が there 構文に現れない理由について、Chomsky (2013, 2015)のラベル付けの視点から説明を試みた。また、被動目的語の統語的な位置に関する本論文の仮説に基づき、料理動詞が結果目的語を項に取る場合は自動詞文に現れることができない理由を説明した。

今後の課題として、通常は非対格動詞として分類されるが there 構文に出現不可能な動詞として die の他にも、vanish や disappear などいくつかの動詞が存在するが、これらの動詞にも本論文の分析が当てはまるか検討する必要がある。本論文では、die が同族目的語を取ることに着目したが、例えば、高見・久野 (2002)では、“die a ... death”という表現は、一般の同族目的語構文とは異なった歴史的派生過程を持つ例外的構文として扱われており、このような歴史的な事実と本論文の分析との関連をさらに検討する必要がある。また、料理動詞を例にあげ、ある動詞が自動詞文に出現できない現象について取り上げたが、自動詞用法のみを持つ動詞が他動詞文に出現できない条件についても検討する必要がある。さらに、本論文では結果目的語を項に取る料理動詞を例にあげたが、他にも結果目的語を項に取る作成動詞が存在しており、それらの動詞についても本論文の仮説により説明が可能か検討する必要があることから、これらを今後の研究課題としたい。

[注]

\* 本研究は、JSPS 科研費 20K13068 の助成を受けている。本論文の執筆にあたり貴重な意見をいただいた査読者及びインフォーマント調査に協力いただいた英語母語話者 2 名に感謝申し上げたい。

<sup>1</sup> 吉川 (1995)は、(i)のように料理動詞を自動詞文で用いるのは誤用であると指摘しているが、Levin (1993)では(ii)のように bake は他動詞用法、自動詞用法ともに容認できると判断している。

(i) \*The potatoes have boiled. (吉川 1995: 111)

(ii) a. Jennifer baked the potatoes.  
b. The potatoes baked. (Levin 1993: 243)

筆者が調査した英語話者 2 名によれば、(iib)だけでなく、(iii)のような例も容認可能なようである。

(iii) The cake baked.

ただし、その英語話者 2 名は、(iv)のように動詞を bake から make に変更すると容認不可能になると判断した。

(iv) \*The cake made.

おそらく、今回調査を依頼した英語話者は、(4)における the potatoes だけでなく、(2)における a cake も被動目的語として解釈しているのではないかと思われる。本論文では影山 (1996)と Levin (1993)の文法性判断に基づいて議論することとする。

<sup>2</sup> 非能格動詞文や能格動詞文で there 挿入が不可能である理由については、Honda (2020)を参照されたい。

<sup>3</sup> 正確には、Milsark (1974)では、(8)の例に見られる some は不特定数を表す some を指す sm と記載されているが、本論文では詳細に立ち入らず、some と記載することとする。

<sup>4</sup> 査読者より、(26a)の構造においてなぜ原因項が必要とされるのかという疑問が示された。英語話者 2 名に調査したところ、結果目的語を伴う文では、(ib)のように主語を動作主ではなく原因項として解釈するような文は容認できないようであった。

- (i) a. She intentionally baked a cake.  
b. \*She unintentionally baked a cake.  
(ii) a. She intentionally baked the potatoes.  
b. She unintentionally baked the potatoes.

ただし、Wordbanks Online (<https://scnweb.japanknowledge.com/WBO2/>)で調査したところ、以下のようない例が見られた。(太字は筆者)

(iii) Further doubts about the security of contactless cards were raised recently after Nat-West and :ORGANISATION: customers found they had **unintentionally made payments** at :ORGANISATION: and Pret A Manger because their cards were close to readers.

(iii)の例における payments は結果目的語であると考えられるため、(ib)の容認性が低いのは統語的な理由によるものではなく、ある人物が意図せず何か料理を作ってしまうという状況が想定しにくいことに起因している可能性もある。さらに、筆者が同じ英語話者に調査したところ、2 名とも(iv)-(v)に示す文はどれも容認可能であると判断した。

- (iv) a. She intentionally dug a hole.  
b. She unintentionally dug a hole.

- (v) a. She intentionally made an error.  
b. She unintentionally made an error.

(iv)-(v)における、a hole や an error は典型的な結果目的語である。一方で、査読者が指摘するように、結果目的語が現れる文においてはそもそも原因項が投射されないという可能性も排除できない。一つの可能性として、原因項と被動項が実は同じ  $\theta$  役割であり、文脈によってどちらか一方に解釈が決まるのかもしれない。本論文では、原因項と被動項は別の要素であるとし、(26a)のように結果目的語が現れる文においても原因項は投射されると仮定して議論するが、(26a)の構造において原因項が実際に必要であるのかという点は今後の検討課題としたい。

<sup>5</sup> Honda (2020)では、D1 は接辞であるためラベル付け能力を持たない主要部であり、(29)全体のラベルはこのままでは決定できないため、ラベルを  $\alpha$  と記載している。D2 が D1 に付加される場合は、全体のラベルは D1-D2 となる。また、D1 が(29)から移動すれば、D1 は  $\alpha$  内でラベル付けから見えなくなるため、(29)は D2P とラベル付けされる。本論文では、この詳細には触れず、単に  $\alpha$  と記載しておく。

<sup>6</sup> (30a)は(18a)と異なり、前置詞句を含まない文になっており、(18a) の“on the horizon”といった前置詞句が(30b, c)のような構造のどの位置に現れるのかという点は疑問として残る。この点については、Honda (2020: fn.12)を参照されたい。

<sup>7</sup> 概念構造に CONTROL という抽象的な述語を含むことは、本論文の分析では v2 や v1 などの軽動詞が構造の中に含まれることを意味している。したがって、v2 や v1 が appear や die に該当する動詞句を選択できない理由については不明なままである。一つの可能性として、die の語根である  $\sqrt{\text{DIE}}$  が v2 や v1 と組み合わせられた場合は、kill という別の語彙として具現されることが考えられる。この点については今後の課題としたい。(22)のように die という動詞が同族目的語を取りながら、受動化が不可能である理由として、受動化には対格認可に必要な v2 が必要であり、die はこの v2 を欠いているため受動化できないと考えられる。同族目的語を主語にした受け身文に関する議論は高見・久野 (2002)を参照されたい。

<sup>8</sup> (43)全体の集合のラベルが  $\phi$  素性ではなく、TP となっている理由については Saito (2016)を参照されたい。

<sup>9</sup> ただし、-e-という接辞は結果目的語だけでなく被動目的語が現れる場合にも自動詞文を作る際には必要となる。

- (i) a. 彼女がイモを焼いた。  
b. \*イモが焼いた。  
c. イモが焼けた。

日本語においては自他交替の際に自動詞と他動詞の間に形態的な違いが見られることから、-e-という接辞と軽動詞 v の違いは単にフェイズを形成するかどうかという点だけではないと考えられる。この点については今後の課題としたい。

## 参考文献

- Chomsky, Noam (2000) “Minimalist Inquiries: The Framework,” *Step by Step: Essays on Minimalist Syntax in Honor of Howard Lasnik*, ed. by Roger Martin, David Michaels and Juan Uriagereka, 89–155, MIT Press, Cambridge, MA.
- Chomsky, Noam (2001) “Derivation by Phase,” *Ken Hale: A Life in Language*, ed. by Michael Kenstowicz, 1–52, MIT Press, Cambridge, MA.
- Chomsky, Noam (2008) “On Phases,” *Foundational Issues in Linguistic Theory: Essays in Honor of Jean-Roger Vergnaud*, ed. by Robert Freidin, Carlos P. Otero and Maria Luisa Zubizarreta, 133–166, MIT Press, Cambridge, MA.
- Chomsky, Noam (2013) “Problems of Projection,” *Lingua* 130, 33–49.
- Chomsky, Noam (2015) “Problems of Projection: Extensions,” *Structures, Strategies and Beyond: Studies*

- in Honour of Adriana Belletti*, ed. by Elisa Di Domenico, Cornelia Hamann and Simona Matteini, 3–16, John Benjamins, Amsterdam.
- Fujita, Koji (1994) “Middle, Ergative and Passive in English: A Minimalist Perspective,” *MIT Working Papers in Linguistics* 22, 71–90.
- 藤田耕司・松本マズミ (2005) 『語彙範疇 (I) 動詞』, 研究社, 東京.
- Haegeman, Liliane (1991) *Introduction to Government and Binding Theory*, Blackwell, Oxford.
- Honda, Takahiro (2020) “A Split Phi-Features Hypothesis and the Origin of the Expletive *There*,” *English Linguistics* 37, 1–33.
- Horita, Yuko (1996) “English Cognate Object Constructions and Their Transitivity,” *English Linguistics* 13, 221–247.
- 堀田優子 (2005) 「同族目的語構文のカテゴリーに関する一考察」, 『金沢大学文学部論集 言語・文学篇』, 第 25 号, 67–88.
- Hornstein, Norbert (1999) “Movement and Control,” *Linguistic Inquiry* 30, 69–96.
- 影山太郎 (1996) 『動詞意味論-言語と認知の接点-』, くろしお出版, 東京.
- Keyser, Samuel Jay and Thomas Roeper (1984) “On the Middle and Ergative Constructions in English,” *Linguistic Inquiry* 15, 381–416.
- 金水敏 (1994) 「連体修飾の『～タ』について」, 田窪行則 (編) 『日本語の名詞修飾表現-言語学・日本語教育・機械翻訳の接点-』, 29–65, くろしお出版, 東京.
- Larson, Richard K. (1988) “On the Double Object Construction,” *Linguistic Inquiry* 19, 335–391.
- Levin, Beth (1993) *English Verb Classes and Alternations: A Preliminary Investigation*, University of Chicago Press, Chicago.
- Levin, Beth and Malka Rappaport Hovav (1995) *Unaccusativity: At the Syntax-Lexical Semantics Interface*, MIT Press, Cambridge, MA.
- Milsark, Gary L. (1974) *Existential Sentences in English*, Doctoral dissertation, MIT.
- Sabel, Joachim (2000) “Expletives as Features,” *WCCFL* 19, 411–424.
- Saito, Mamoru (2016) “(A) Case for Labeling: Labeling in Languages without  $\phi$ -Feature Agreement,” *The Linguistic Review* 33, 129–175.
- 高見健一・久野暉 (2002) 『日英語の自動詞構文』, 研究社, 東京.
- 吉川千鶴子 (1995) 『日英比較 動詞の文法』, くろしお出版, 東京.